



通年農業をめざす

桜井光昭さん(22歳・動物師免許)

経営形態 水稲+果樹

信濃川堤防を戸石新田から庄瀬方面へ向かうそのほぼ中間点。左手に桜井さんの大きなブドウハウスが目にとまります。将来は農業と異なった道で、工業高校を卒業した彼でしたが、家の事情で後継者に――。

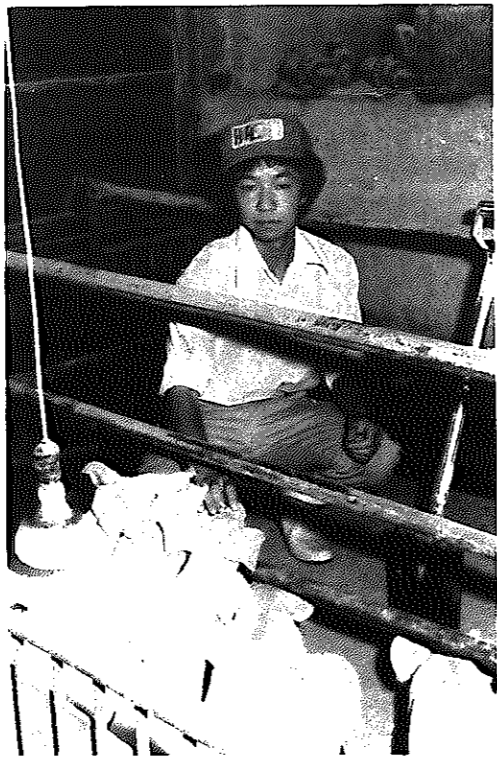
「あのころは、中学校の同窓生で農業を継いだのが自分一人でしょう。何か寂しいような気持ちになりました」と光昭さん。しかし、今では、もうそんな気持はどこかへ。父親・栄一郎さんの片腕として経営の手伝いをし、市の農業青年教室で、果樹部門を勉強しています。

耕作面積は三百三十七・二ア。水稲とブドウ栽培が経営の主体です。労働力は主に両親と本人の三人で、十二月、一月に少し暇になるだけといいます。光昭さんは「父から見ればまだ満足いく仕事はしていないでしょうが、ようやく自信めいたものがわいてきました。これだけの資本を投じてきた両親のためにも、ブドウ栽培に打ち込みながら、比較的時間の空く冬期間でも、仕事のできる農業を、考えていきたい」と、通年農業をめざす決意を話してくれました。

養豚飼育にかける

現在の団地で、父親の嘉男さんが養豚を始めたのが四十七年の十月。高校を卒業後、彼は県の養豚業教育センターで畜産の勉強――高校では農業土木を専攻してきたのですが、畜産への移行は、別に苦にはならなかったそうです。面積二千九百七十五平方メートルの土地に豚舎が四棟。そこには種豚、肉豚合わせて三百五十頭が飼育されています。

流通機構上の問題もあると思いますが、これらの需用を高めるためには「まず、消費者に喜ばれる良質の肉を持つ豚を、数多く育てなければだめ」。そのための情報収集や毎日の勉強が大事と、嘉男さんはいいます。また、経営者にとって豚コレラなどの病気は大敵です。健康管理衛生対策には全神経を集中するうえで、「おかげで旅行にも行かない」と苦笑いも。人工受精師の免許を持つ彼。技術アップをはかれば、まだまだ畜産は伸びる可能性がある」と、養豚にかける夢は大きく広がります。



小林嘉之さん(25歳・浦梨)

経営形態 水稲+畜産

セロリー栽培に挑戦

「意欲を持って毎日仕事をしていきます」。農業高校を一昨年卒業したばかりの勉さんは、約二百九十八アの水田耕作を、父親の太一さんにまかされ、うまい米作りに専念しています。耕作水田のうち、コシヒカリは場は百九ア。「学校での勉強は基本的なもの。いざ実践農業に踏み込んでみると難しく、うまくいかないもんですね」。こんなことから、少しでも多くの技術を身につけようと、部落の稲作研究会に入り、勉強を重ねています。日曜日。友達が出かけるのを見

ると、うらやましい気もする。「でも農業のよい点は、時間に束縛されないと」と自分にいい聞かせ、覚悟を決めているようです。これからの課題として、そ菜ハウスの面積を広げること、セロリーの栽培に取り組んでみたいといっています。セロリーは、市内でもあまり栽培されていない作物。「自分自身が一生懸命やれば、それだけの収入が得られるのが農業。苗作りをうまくやればなんとかなると思う。普及所の指導員のアドバイスを受けて成功させたい」と、あえて挑戦する勉さんの気迫に、期待したいものです。



大竹勉さん(20歳・上赤洗)

経営形態 水稲+そ菜

共同経営を夢みて

吉田信一さん(22歳・下笠巻)

経営形態 水稲+そ菜

吉田さんの耕作面積は、受託を含めて約四百七十ア。水稲とそ菜が経営の主体です。実質的な労働力は、信一さんと両親の三人。ですから一年中忙しく、もうこれ以外の部門には手を広げられないと話しています。

「今の状態だと嫁さんの来てがないだろう」と信一さんは笑う。こうしたことを踏まえ、なんとか労働時間の短縮をめざした経営を考えている。そして将来は、複数農家との共同経営を夢みているそうです。

農家に生まれ、そして経営に参加し、今一番悩んでいることは、肥料をはじめとする資材の高騰。作物価格は頭打ち、逆に生産コストは上がる一方。こんな中であって、思い切った施設改善などはできないといえます。「だから、現在、手掛けている作物の中から利潤幅の大きなものを選択し、それに打ち込んでいくことが最良と思っている」と、厳しい状況下で、安定経営をめざす心がまえを語ってくれました。

